

令和7年度第2回 青森県地方独立行政法人評価委員会 議事概要

日時：令和7年8月26日（火）

13時30分～15時30分

場所：青森県庁北棟2階222会議室

[事務局]

本日は、半数以上の委員が出席しているため、委員会成立となる。

[曾我委員長]

公立大学法人青森県立保健大学の令和6年度業務実績評価について審議をする。業務実績に関する事業年度評価は、当該事業年度における中期計画の実施状況の調査・分析を行い、その結果を考慮して業務実績全体について、総合的な評定を行うこととしており、当委員会が主体的に作成・決定するものである。このため、先般、法人から提出された業務実績報告書に基づき、法人ヒアリングという形で調査・分析を行った。その後、各委員から評価意見を事務局に提出したところである。

本日は委員の皆様のご意見を事務局がまとめた令和6年度業務実績評価書案を基に修正その他の意見交換を行い、最終的な評価書へとまとめる。業務実績の評価の進め方としては、最初に全体の項目を確認し、その後全体評価へ進み項目別評価を行っていく。

そして、全体評価に付け加えた方がよいもの又は削除した方がよい部分も確認し、最後に取りまとめをする。

(1) 教育に関する目標を達成するための措置

[伊藤委員]

特に評価する事項の学生の健康管理の文章について、「多彩な広報」の文言は馴染まないため、「多様」など他の言葉に置き換えてはどうか。

(異議なし)

[曾我委員長]

「多彩な」を「多様に」変更する。

[香取委員]

その他の意見の19歳以下人口の文章について、「現状等の分析と取組を強化しつつ現在の倍率を維持できるよう期待する」とあるが、大学関係者の方はご存知のように、倍率が例えば5.6倍から5.3倍になったから質が落ちたということではないこともあるため、現在の倍率を維持できる等、倍率という具体的な言葉を入れなくてもよいのではないか。

[保健大学]

香取委員の発言のように、学科単位での受験生の動向は前年度の倍率の影響を受けることがある。このことからある程度の変動はありつつ、19歳以下人口の減少はありながらも、減少スピードを勘案したときに維持できるのが最低ラインであると考え、さらに上振れをするよう努力するということだが、今後、この記述が次の6年間の中期目標・計画等にも反映されることを考えご配慮いただいたことは、大変ありがたい。

また、同じくその他の意見の「転学生」についての表現であるが、当大学では業務実績報告書では特に「転学生」との表現はしていないため、今後しっかり取り組むために「学生」の具体的な内容について教えていただきたい。

[曾我委員長]

倍率については、倍率が高ければ良いことではなく、優秀な学生を確保したいということであると思う。そこで、その他の意見の19歳以下人口の大幅な減少の文章については、「取組を強化・維持することを期待する」の文章に変更したいが、いかがか。

(異議なし)

また、保健大学からの質問について、その他の意見の「転学生」の表現だが、業務実績報告書では特に転学生との表現はしていないようであり、これについて三上委員から具体的な内容についてお願いしたい。

[三上委員]

この認識を間違えた可能性がある。学生が他の大学から転入する場合はどのように表現をしているのか。

[保健大学]

他の大学から進路変更によって本学に入り直す学生は極めて限定的である。ほとんどが高校卒業後に入ってくる学部生であり、他大学等からの転学について、これまでも積極的に報告はしていないが、当然、他に合理的配慮を必要とする入学生について、社会福祉学科や看護学科の教員が、かなり手厚く支援をしている。これについては業務実績報告書でご報告しているが、特に進路変更した学生の支援についての説明はしていない現状である。

[三上委員]

やはり認識を間違えていたため、転学生の文章を削除していただきたい。

(異議なし)

[曾我委員長]

保健大学が作成した資料を確認したが、確かに「転学生」は使用していなく、「進路変更」の表現はある。この小項目の評価はSであり、三上委員のご意見も全体として高く評価していただいている。そこで、この文章は削除させていただきたいと思うが、いかがか。

(異議なし)

(2) 研究に関する目標を達成するための措置

(異議なし)

(3) 地域貢献及び国際交流に関する目標を達成するための措置

[曾我委員長]

特に評価する事項の1つ目の地域に必要な人財の文章について、「財」の字が使用されているが、3つ目の県の喫緊の課題である就労人材の文章では、材料の「材」である。どのような使い分けになっているのか。県の方から回答をいただきたい。

[県]

特段理由はないため、バランスを考え、「材」の字で統一していただいて問題ない。

[曾我委員長]

理由があるならば変えても変えなくてもいいと思うが、委員の方はいかがか。

(意見なし)

[曾我委員長]

それでは、材料の「材」の字で、ここは統一することにする。

[香取委員]

その他の意見1つ目、採用力向上セミナーについての文章で、「事業者の行動変容の検証」とあるが、難しいのではないかと思います。行動変容を検証するとなると、どのような内容のケアの検討をするのか、心理学的な研究をするのかとも考えた。もう少し緩やかな「事業者の行動変容を後押し」などの表現が現実的と思う。

[曾我委員長]

おっしゃる通り検証は大変である。ここでの検証とは、例えば非常に良い内容のセミナーを行っているが、その成果として事業者が早めに求人を出しているか等についての検証である。ただ、事業者の行動変容の検証に力を入れるよりも、良い事例の横展開の方に重きを置いた方が良いため、「事業者の行動変容の検証」を「事業者の行動変容の事例」の文章に変更したいが、いかがか。

(異議なし)

(4) 業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するための措置

[伊藤委員]

その他の意見1つ目、ワーキングチームの文章について、人材の流動性が高いのは一般の事業者と比較した場合、大学では多いが、教員の方が流動化することは決してマイナ

スではないと思う。それにより多様な知見を持った人材が多く在籍することができるからである。その方々の知見の蓄積が大学の財産になるし、また青森県の財産にもなる。そのような中で、知見を蓄積できる仕組みとして、また充実した議論ができる場としてワーキングチームの下に小単位のチームを設けられないか。ぜひ保健大学の意見をお聞きしたい。

[保健大学]

大事なご指摘である。大学の発展においてはコアの部分と考えている。

仕組みは20年前に研究者、大学教員の流動化を国が図るということで、任期付き採用が求められた。現在法律では任期を付けた場合、2回任期を繰り越せば、その後は任期をつけないようにしなければいけないという現状である。ある意味では理論的には流動性が図りにくい状況である。

アメリカ等では研究者としてのキャリアパスが示され、結果的に残る人材あるいは流動化によってキャリアアップするような人材が存在し、初めてアカデミアの世界の大学が成り立つ。

一方、私どもの地方の大学では、なかなか教員が来ない状況が各学科において続いた。看護学科の場合、看護師やその他の専門職のキャリアを持ち、教員になるときに大学の教員研究者のベースより実務家として大学に入ったときに、どのようにキャリアアップを図るかというのは、とても深刻な問題であったため、教員として長続きしない方もいる。

また、今は有り難いことに、公募をすると、良いサイクルで全国から大変優秀な教員が集まっている。多分野横断的な形で新たな研究テーマやスキル、発想を持った方が本学に集まるようになった。それにより、モビリティが高まっている。

また、研究だけではなく、マネジメントでも他大学で教授としてよい仕事をされた方が本学の教授としておいでくださり、組織運営上も大変層が厚くなっている。この状況をさらに発展させるため、今では、様々な先生方が国家試験を合格させる教育課程と、専門性を発揮し、教育や研究をしている。さらに、大学は運営も自律的創造的であるべきということは強く思っている。若いうちから大学の将来構想マネジメントの意図的なことを押し付けるのではなく、自主的な形で参画してもらうということを行っている。

会社組織であれば、マネジメントにつけるのは会社組織の中でのキャリアアップの自然な形である。一方、大学教員においてはマネジメント的なものは雑用であると、研究時間に割くべきだと議論がある。強制、押しつけではなく、自分自身の教育者及び研究者としてのキャリアアップにも繋がるし、自分が大学でやりたいことをやっていくために、そういうところに関わっていききたいという教員が多く参画してくれば、次に繋が

る。そして大学は教員や職員の自主的及び自律的な積み重ねにより、発展していくと思う。上からの指示に従ってやることではないため、自律性、継続性、発展性が失われないようマネジメントするよう意識している。

[伊藤委員]

大変参考になった。

[曾我委員長]

保健大学のお話から、既に人材として重要な資源を蓄積する取組をしていると感じた。ここはこのままでもよいのか。

一つ逆に聞きたいが、ワーキングチームを作り、小単位のチームについては行っていないのか。

[保健大学]

これまでは将来構想的な大枠の話について行ってきた。これが具体的なアクションプラン、すなわち中期計画を具体的に検討するとき、若手の教員、職員も加えてやっているとよいとのことで検討することになると思う。

[曾我委員長]

今回の件だが、保健大学への意見としては少し細かく感じる。また特に評価する事項の部分で保健大学の取組を評価している。その他の意見には、今後取り組んでほしい形を示すものであるから、既にできていることは書かない方がよい。そこで、その他の意見を削除してはいかがかと思うが伊藤委員どうか。

[伊藤委員]

ワーキングチームは一つの塊、大きな組織の中で概論的なものを決め、その下にプロジェクトチームを作る。これは、各論的な議論をそれぞれテーマごとにしていくようなイメージである。そこは同じ考えか。

[保健大学]

ワーキングチームもプロジェクトレベル的なことも検討しつつ、本学で目指しているところが横断的な見方をするというので、逆に言うと個々の細かいチームがあり、ドメイン化し、少し整理しながらミクロの話とマクロの話で検討してきた。ご指摘のことはごもっともで、今後も各論については若手も含めて検討を行っていくところである。

[伊藤委員]

そのようであれば、削除でお願いしたい。

[曾我委員長]

先程、保健大学も話していたように、大学の中では研究と教育以外のマネジメント業

務等は雑務のイメージもある。会社の場合、マネジメントは業務であり、当然小単位のプロジェクトチームを作り、完璧にやっていくイメージではないか。一方、大学に固有の事情もあるため、あまり縛らない形がよいのではないかとと思われる。申し訳ないがここは削除させていただければと思う。

(異議なし)

また、その他の意見2つ目の文章について、「次代」を、「次世代」に修正してよろしいか。「次代」というと、次の学長のイメージになるため、「次世代」でお願いしたい。

(異議なし)

(5) 財務内容の改善に関する目標を達成するための措置

(異議なし)

(6) 教育及び研究並びに組織及び運営の状況について自ら行う点検及び評価並びに当該状況に係る情報の提供に関する目標を達成するための措置

[三上委員]

前年度も同じ議論があったと思うが、6項目中Sが4つとなっている。5の評価にするには、あと一つSがあればいいのか。委員の皆様と確認したいと思っている。

[曾我委員長]

どのように考えたらよいのかということだが、評価の基本的な考え方の項目別評価には、5段階で評価しますと書かれている。

教育研究についてはその特性に配慮し、専門的な観点からよりは、外形的な進捗状況を評価することになっている。一方、教育研究以外では、専門的な観点も入ると思うが、悩ましくもある。この項目については、全員が4と評価をしている。もちろん項目目標を上回っており素晴らしいことなのは間違いないが、その数が超えているから素晴らしいと言えるかどうかは、各委員、いろいろお感じだと思う。これについて伊藤委員いかがか。

[伊藤委員]

数字が超えているから5にするということは、悩ましいところである。

[曾我委員長]

ここはできて当たり前の箇所であり、できなくてはならないところである。しっかりやっていることを認識したというところではないか。

[三上委員]

理解した。

[曾我委員長]

特に評価する事項の情報公開の文章について、「特に、小中学生向けに」とあるが、ここは削除し、「特に、大学の存在価値を高めるための広報戦略」の修正でいかがか。

(異議なし)

(7) その他業務運営に関する重要目標を達成するための措置

[伊藤委員]

その他の意見のコンプライアンスの文章について、「実効性を担保できるよう」は大変だと思う。例えば他大学の先行事例を、情報収集の一環で実行してほしいとコメントで入っていたが、非常に難しい。当学では顕在化事案については、迅速なレポートラインが確立され、事後の対応、再発防止が検討される仕組みが整備されており、問題はないと思料される。難しいのは、潜在化の部分である。事業会社の一般的な事例として、私が以前、金融機関の経営管理部門において行った、オフサイトモニタリングとオンサイトモニタリングを両立させる仕組みづくりをした経験がある。

オフサイトではアンケート等により情報を収集し、オンサイトは監査部が実地監査を行い、潜在化事案を洗い出す仕組みである。実効性の担保までいかないが強い牽制機能がある仕組みとして先行の金融機関で取り組んでいる事例である。顕在化していない事案を洗い出す場合においては、プライバシー保護に十分留意する必要があるが、仕組みが整備され、運用されることで、一定の実効性が担保されている状態であるとの評価を受けた仕組みである。ただ、本当の意味での実効性の担保は難しいものであった。

他大学の先行事例や情報収集あるのか。オフサイトもオンサイトもやろうと思えばできると思われるが、経営資源の問題もありメインの仕事ではないと思う。ただ、社会的にハラスメントを含むコンプライアンス対策については重要視されているなかでは、当学としても優先課題として体制づくりに取り組む必要性の検討をお願いしたい。

[竹本委員]

体制としては現時点で整備され、運用されていると認識している。ただ、ハラスメントやコンプライアンスの内容は時代によって変遷していくものもあるため、その時々に合わせて修正していくことが大事である。実効性の担保は少し強い言い方かもしれないが、実効性が上がるようにとの趣旨で捉えていただければいいと思っている。

また、見直しを行いかつ自ら検証し、よい方向に進めていっていただきたいとの趣旨で触れたものであった。

[曾我委員長]

コンプライアンスやハラスメント等は、国の未来を担う若い人の教育という観点でも非常に重要なことで、県立保健大学もかなり進めていると認識している。

また、時代の要請に合わせて常に検討していくことも重要であり、保健大学は実行していると思っている。実効性を担保していただきたいでは厳しすぎると思うが、実効性を担保できるよう見直しなどの検討を続けるということで、このまま進めていただければいいと思う。保健大学はいかが。

[保健大学]

常に振り返って見直しをすることは引き続き行っていきたいと思っている。また、実際に実効性が担保できていたかどうかについては、前の議論の検証をすることが難しい。他大学の例、先行先進例について、理事が他大学の臨床評価等もやっているが、ほぼ詳しいことは出てこない現状である。

各大学から報告される資料について、また公立大学については、各大学の様々な取組等の共有はされるが、見たことがない現状である。

仕組みを丁寧に運用しているが、組織文化の話となったとき、学生を教育する中で、今後大学の重要な方針としてD E IあるいはD Iを前面に押し出しながら組織文化の醸成を図っていききたい。ハラスメントの定義にふれた場合、対処するルールを形式通り実行していく。むしろハラスメントを生まないようなD E Iの組織文化を今後、考えていく。

今年度もハラスメント等の研修を行っているが、幅広くD Iやお互いの心理的安全性からアプローチをし、仕組みとして運用していくとの両面から進めていきたいと考えている。

[曾我委員長]

そうした試みは教育や研究力の向上としても非常に重要なことだと思っている。オンラインやオフサイトモニタリングをやるかどうかではなく、様々な方法があるということを学ばせていただいた。以上により、修正なしでよいか。

(異議なし)

(1) 総評

[曾我委員長]

では総評を確認する。

これまで(1)から(7)までの項目別評価を行ってきたが、その中で特に評価できるものについて、5点抜き出して書かれている。この5点の書き方でよいか、又は加える必要、あるいは削る必要はないか、ご意見をいただきたい。

[伊藤委員]

1 番目に研究成果等を入れるのはいかがか。1 番目が研究成果ではなく、合格率、定員管理をしっかりやり、県内定着のために取り組んでいると表現されている。3 日目、4 つ目は内部的な体制の評価をしている。最後はディスクロージャー的なものが諸説出ているのであれば、一番上に研究を、大学としての一番メインのところを入れるとよいのではないか。

[曾我委員長]

今の意見に対して香取委員いかがか。

[香取委員]

大学としての研究に関するものを 1 項目入れるのは賛成である。ただ順番は大学教育機関の内容であるため、2 番目の方がよいと感じた。

[竹本委員]

研究に関する文章を入れることについて私も賛成である。2 番目に入れるのがよいと思う。

また、1 行目の「概ね計画通り」との文言に違和感がある。評価段階で概ね順調な進捗状況とあるため、皆さん 4 をつけている。そのため、「概ね」を削除し、計画通りの表現でよいのではないか。

[曾我委員長]

私も「概ね」に違和感を抱いていた。「概ね」は削除させていただければと思うがいかがか。

(異議なし)

続いて研究の文章の追加についてだが、香取委員の発言のように、2 番目に入れることがよいと感じた。

研究の何の文章を入れるかだが、(2)の研究に関する目標を達成するための措置、特に評価する項目の 2 つ目にある、「ヘルスプロモーション戦略研究センターの運営機能の強化と業務の効率化を実現していること」、「プロジェクト型研究を中心とした研究活動の取組が順調であること」、この 2 つのどちらかを書けばよいと思っている。1 つ目のヘルスプロモーションの方は、運営機能の強化と業務の効率化ということなので、研究に焦点をあてるとプロジェクト型研究を中心とした研究活動の取組が順調であることを載せるのがよいと思うが、いかがか。

[香取委員]

理事長の話聞いて、「多分野横断的モビリティを高める」がとてもいい言葉と思った。青森県は定着を呼び込むとの考えが多いが、モビリティを高めるという言葉はヨーロッパで50年前から言われている。青森県にとっては非常に新鮮であり、研究者が外に出てまた外の研究者を呼び込む活動もやっている。その多分野横断的な研究と研究者のモビリティを高めながら、このようなことをやっているとの言葉を入れた方が非常に効果的と思う。

[曾我委員長]

モビリティはとても大事だと思うが、ここに書いてある文言以外のものは避けたいと思っている。ここに書いてある文言であれば、プロジェクト型研究という言葉を中心に書いてみてはどうか。プロジェクト型研究やヘルスプロモーション戦略研究は学科横断型で行っているため、香取委員の思いの半分がここにあると思う。保健大学はいかがか。

[保健大学]

大変ありがたきご意見を承っている。こちらから提案する話ではないが、本文はプロジェクト型研究との表現をつけ、その中で、ただプロジェクト型研究というと、よくあるまさに若手研究者、大学院生あるいは大学院を修了した方をチームに加えて、多分野横断的に行っているような脚注を、もし入れていただければ、本体はこのままにし、プロジェクト型研究がうまく進んでいることはこのような意味であると理解いただけると、私どもとして大変ありがたく思う。

[曾我委員長]

このプロジェクトは、特任教授や外部有識者、プログラムオフィサー等も関係しているのか。

[保健大学]

プロジェクト型研究とは、青森県が抱える諸課題の解決に向けて、多分野横断型でチームを組む研究である。そこにおいて若手研究者、大学院生の育成を主眼として捉え、大学院を修了し、地域で活躍している方等、多様な研究者、実践者からチームが構成されることを書いていただくと、私の気持ちは伝わると思う。

[曾我委員長]

今のことを踏まえて文言を考えたいと思う。「青森県の課題解決を目指すプロジェクト型研究に若手研究者や大学院生、特任教授・外部有識者などが加わり、多分野横断型の研究が進められている」では保健大学いかがか。

[保健大学]

大変ありがたく存じます。

[曾我委員長]

それでは、この文言を全体評価の２つ目に入れることとする。

(異議なし)

[保健大学]

「情報公開を進め」の文章について、「幅広い広告媒体」となっているが、これは「幅広い広報媒体」と思うが、いかがか。

(異議なし)

[曾我委員長]

文言の修正、全体評価２つ目の項目を加えることとしたが、他に大きな修正意見等は無かった。令和６年度業務実績評価について、資料１の評価書案のとおり決定するという事でよろしいか。この会議の中で出た文言の修正等については、私に一任いただけるようお願いしたい。

以上で本日の会議を終了する。